

拙者が好きな武士語

武道通信の<日記>では「拙者」で通している。ほかに「手許不如意」はよくも使う。なにせ裏店の傘貼り浪人浪人であるゆえ。「読書余論」塾生には受講料は「束脩」と云う。

江戸の世の言葉は身分制度の箍〔たが〕に嵌められている。

武士同士でも「罷り越しました」「大儀である」と身分の格差が歴然。

同じ身分、輩〔ともがら〕同士の「一つまいろう」（まずは一杯）や「過ごされよ」（パッといきましょう）。居酒屋で使ってみたいものだ。

剣での好きな武士語がある。

「発剣入鞘〔ほっけんにゆうしょう〕」「一閃の業〔いちせんのわざ〕」「裂帛「れっぱく」の気合」などなど。ゾクゾクする。

時代小説家の造語もある。

「刃風」「剣氣」（柴田練三郎）。「鞘走る」（五味康祐）。「一髪之差」「難剣」（藤沢周平）などなど。

剣をとったことがないと想像するに易い著者の『使ってみたい武士の日本語』に「反りを打つ」がある。本屋で立ち読みし、首をかしげた。

「鯉口を切る前に、反りを上に返す」とある。打刀ははじめから刃は上にある。

武士語はかるうじて残ったが、当時の常識は残らなかった。

武士は二本差しである。脇差の柄が腹の前にある。大刀に手をかけるとき邪魔である。で、大刀の「反りを打ち」、刃を下にしてから右手を小刀の上越しに柄を握る。手の内をそのまま抜く。おわかりか。

さりとしてコレも全国一律の共通作法でない。三百予国のお国柄で大小二本の差し方が違う。下緒の結びをしかり。ここをしかと抑えておかねばならぬのが武士の作法。

拙者、いつも和紙を懐に入れてある。懐紙である。畳紙・帖紙〔たとうが

み}とも云う。この懐紙の使い方に好きな武士語がある。「隠し止め」。対峙し倒して相手の血を懐紙で拭う。これを相手の袂に押し込むのだ。

この世にオサラバする前に、これを一度やりたいと願っている（呵呵=大笑い)